尾花沢を背負って立つ学校～自分たちで創り上げるシン尾花沢中～

校長通信

輝け！シン尾花沢中

第１２４号
令和７年
11月13日

まちのさかえは　国の富　はたらくものの　よろこびを

自分の考えを堂々と表現できる尾中生①

山形新聞に「少年少女の声」というコーナーがあります。今年度、ここまで本校２年生２名の「声」が掲載されました。少年の主張と同じように、自分の名前を明かすという責任を伴って、自分の意見を堂々と述べています。既にお読みになられた保護者の方もおられると思いますが、改めて今号と次号でそれぞれ紹介します。

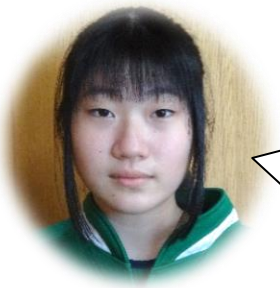
一つ一つの音に向き合う　■２年　木内紗希さん　　2025.8.7 山形新聞

私は、吹奏楽部に入部しいろいろな楽器に触れ、演奏する楽しさを知りました。先日の地区予選会で、私たち部員は練習の成果を最大限に発揮し、楽しく納得のいく演奏をすることができました。その結果、さらに上位大会で演奏する機会を得ました。

大会ではたくさんのお客様が演奏を聴いていて、とても緊張しましたが笑顔を忘れずに演奏し終えると、たくさんの拍手をいただきました。それは、大きな緊張感が充実した喜びに変わる瞬間でもあり、吹奏楽の醍醐味の一つです。

私にとって音楽はとても身近なものであり、Ｊポップもよく聴きます。吹奏楽の譜面に歌詞はありませんが、演奏中にその一音一音に作曲者の想いが込められているのを感じることがあります。リズムのテンポや音の強弱にそれが表現されていて、その解釈が私には難しいのですが、演奏している瞬間に「あ、この旋律はうきうきする」「このパートは切ない」などと気持ちの変化が起きるのです。

音を通じてこういう想いを他の部員と共有し、いい演奏ができたと感じた時は、大会や練習にかかわらず「やった！」という気持ちになります。部員とこんな気持ちを味わうことができるのは、私の学校生活でも特別な瞬間です。大会での上位入賞が一つの大きな目標ではありますが、日々の演奏でも一つ一つの音に真剣に向き合い、これからも音楽を楽しんでいこうと思います。



丁寧語を使うように気をつけながら、文章を作成しました。新聞に掲載されたことを受けて、家族ラインの話題になりました。これからは、アンサンブルコンテストで納得のいく演奏ができるように頑張ります。

文章を書くことで、自分の考えを整理できるとともに、向かうべき道も定まります。書くことをいとわない尾中生を目指したいものです。

次号では、齊藤史穏さんの「声」を紹介します。　　【文責：校長 工藤雅史】